慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田社会学のこれまでとこれから：慶應社会学の起源・ 形成・ 展開
Sub Title	
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2009
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.14 (2009.) ,p.34- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾150 年記念講演会：慶應義塾の社会学：回顧と展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20090000-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 14 号（2009）

三田社会学のこれまでとこれから

―慶應社会学の起源・形成・展開―

藤田　弘夫

1　社会の変貌と社会学研究の変化

（1）社会学研究の変化

近年、社会の急激な変化にともなって、社会学の学問観も変わってきている。19 世紀末以来の学問的真理や社会科学に関する認識が変化している。社会科学の研究は社会問題や社会現象の背後に貫徹する「法則」や「真理」をもとめるものではなくなっている。ソヴィエトの崩壊は冷戦下で培われてきた科学観にとどめを刺した。社会科学の衰退がいわれるとともに社会科学像は大きく変化しつつある。社会学の研究者のテーマは、日常的な社会問題となっている。

その一方、20 世紀を通じて大学は社会に定着し拡大していった。社会学者の数も飛躍的に増大している。このためさまざまな学会や研究会が組織されている。これらの学会で毎年多くの研究発表がなされるとともに、シンポジウムが開催されている。学問をめぐる社会情勢の変化は多くの学会を必要とするようになっている。こうした学会の隆盛は、大学や大学院の増設により、社会学関係の研究者が急激に増えたためである。これにともなって社会学関係の学会も急増する。とくにテーマの多彩さと柔軟さをもつ社会学関係の研究には、大きな期待が集まった。さらに、21 世紀を迎えるにあたって、文部科学省は大学院を研究者養成から専門家の育成に移行させる政策の切り替えを実施した。これにともなって、大学院生や研究者の数が急増している。また、大学の改革は研究者に自己の研究の点検を余儀なくさせた。こうしたなかで、一人の研究者が発表する論文の数は飛躍的に増えている。今や研究を発表したことよりも、しなかった方がめずらしい時代となっている。論文は教育官僚の年次報告書としての性格を強めている。舌禍事件や筆禍事件はもはや過去のものとなっている。

研究者の増大で研究者のあいだにも、大衆社会化状況が広がっている。社会学の研究も哲学や歴史などとの関連を弱めている。社会学も社会の基礎理論よりも、現実問題への指向性を強くしている。最近の社会学の研究は一面でジャーナリズムに近くなっている。雑誌、単行本、テレビ、ラジオ、インターネットなどでとりあげられた問題を、後追いしているような研究が少なくない。その意味では、社会学という学問分野は、名称はともかく実態は蒸発しかけている。

（2）社会学研究と共通の課題

イギリスの高名な歴史家 H.ホブズボームはアメリカの大学で 20 世紀の歴史について講演し

た時、結構よくできる学生から次のような質問を受けたという。「『第二次世界大戦』というからには『第一次世界大戦』があったのかと」(ホブズボーム 1996：6)。アメリカに限らず、われわれはかつての常識が通じない世界に来ている。

近代史を知らない大学生の存在などごく日常的である。ある韓国の老人は日本の朝鮮支配を知らない大学生と対話して、怒りの矛先をどこに向けていいのかわからなくなったという。しかしその韓国にも、朝鮮戦争はアメリカと闘ったと思っている若者が増えている。人びとが共有する過去が変化してきている。

では、共有された過去はどのような変遷をたどったのであろうか。かつて共有された過去とは地域社会と王国の歴史であった。これを一変させたのが産業化である。産業化は伝統的な村、宗教、王国を解体させていった。これにともなって、伝承や記憶による歴史は実証的、客観的、学問としての歴史に変わったのである。ここに L.v.ランケによる近代「歴史学」の成立がある。産業化は国家と民衆の歴史を生みだした。

産業化の進展による人びとの生活の変化は、社会の新しい哲学や科学による「法則」による認識を生み出した。サンシモン、A.コント、H.スペンサー、K.マルクスなどにはじまる社会理論は 20 世紀を通して大きな影響をもたらした。しかし自然科学とちがい社会理論の発展は困難をきわめた。こうしたなかで、社会全体を体系的に説明する理論に代わって、M.ウェーバーの「理念型」分析や R.K.マートンの「中範囲の理論」が提唱される。現在では、社会現象を一気に説明する社会理論の可能性が完全に否定されたわけではない。しかし社会理論はきわめて抽象度の高いレベルで設定可能なのであり、すべての社会現象が、そこから一気に説明されるものではないと考えられている。社会学の研究はますます個別の対象に即したものとなってきている。その結果、社会学者が共通して必要とする知識の範囲はますます狭くなっている。さらに社会学者はもっぱら現代社会に焦点を当てるために、他の学問にもまして社会学の学問的な由来といった問題に関心をもたないようである。

H.ホブズボームのことばに象徴されているように、共通した過去の経験が変化している。以前は共通の過去が自明のものとしてあった。かつては、政治指導者などの意志やことばが、国家や社会の意志であり秩序であった。人びとの生活のなかに天皇、スターリン、ルーズベルト、チャーチル、毛沢東などのことばが、織り込まれていた。しかし 1960 年代以降、経験の同時代性が変化してきた。人びとは共通の秩序を感じなくなった。

このことは、社会学の研究でも同様であった。一昔前まで社会学者なら、米田庄太郎、高田保馬、戸田貞三などの名前は誰もが知っていた。1960 年代までは清水幾太郎、新明正道、有賀喜左衛門、武田良三、樺俊雄などの名前は多くの人が知っていた。しかし現在では、社会学者で誰もが知っている学者とはマスコミで話題となる学者ぐらいとなっている。

また、このことは、慶應の社会学者の場合も同様である。三田の社会学の研究者について、奥井復太郎や米山桂三の名前は誰もが知っていた。しかし現在、すべての社会学者を知っている人は教員にもいなくなっている。

まして、若い慶應の研究者にとって、三田社会学会といってもピンとこないものとなっている。慶應に三田社会学会があっても不思議ではないが、そんな組織は迷惑なもの以外の何者でもないのかもしれない。まして、過去の教授たちの研究の存在は、きわめて縁遠いものとなっている。最近の研究者はますます慶應の社会学研究科での学問を共有することが少なくなっている。しかし自己の社会学を確立する上で、自分の学んだ大学が何らの意味を持たないのも寂しいものである。とくに慶應の学問は古い私学であるだけに、独特の歩みを辿ってきた。そのことの是非は別にして、慶應に独自性がないとするなら、日本中の大学に特徴がなくなることになる。もし、そうならそれは独自性がないのではなく、独自性が評価されていないことを意味しているのである。慶應義塾の社会学の特徴のひとつは、日本の社会学界のなかで独自性と普遍性の間を揺れ動きながら発展してきたことである。では、どのような過程を経て慶應の社会学の研究と教育は発展してきたのだろうか。

２　三田社会学の研究と教育

（１）ソシオロジーと慶應義塾

慶應義塾の社会学の研究は福澤諭吉にはじまる。福澤諭吉は J.S.ミル、H.スペンサーをはじめ多くの西洋の学者の文献を渉猟している。福沢は同時代人として社会学、社会科学の揺籃期の文献について、実に深い読み込みを行いながら議論の素材としている。このことについては、おびただしい研究があるので贅言を繰り返さない（安西 2005，2007）。福沢は慶應の社会学にとって、空前にして絶後の研究者でもあった。

日本で社会学を最初に講義したのは、後に東洋美術で有名になるアーネスト・F.フェノロサだとされてきた。フェノロサは 1877（明治 10）年東京開成学校と東京医学校が合併して、東京大学（旧制）が発足するにあたって、政治学を担当する外国人教師として招聘された。かれは 1878（明治 11）年から政治学の前提として世態学を講じている。1881（明治 14）年には「世態学」が独立した科目となっている。なお世態学が社会学の名前になったのは、1885（明治 18）年からである。

慶應義塾では、明治の初年に濱野定四郎や門野幾之進がソシヲロジーを講義している。社会学が東京開成学校や他の学校で講義されたかもしれないが、この時の授業が日本で最初の学校での社会学の講義だった可能性も無視できない。後掲の資料１は明治初年の時間割である。資料２の時間割には、講師として門野幾之進の名前もみられる。慶應義塾では小幡篤次郎や馬場辰猪など、多くの塾員が英書の翻訳を進めてきた。明治６年には小幡がトックビルの『アメリカ民主主義』の抄訳を印行している。明治の 10 年代になると、尾崎行雄や松島剛など塾関係者のスペンサーの翻訳があい次ぐことになる。とくに明治 14 年に刊行された松島剛の Social Statics の訳『社会平権論』は、自由民権運動の聖書ともてはやされベストセラーとなった。板垣退助はこの訳書を「民権の教科書」として推奨した。

濱野定四郎は数学を得意とする傍らで、C.ダーウィン、J.S.ミル、H.スペンサーなどを研究

した。1881（明治 13）年には、ソシヲロジーが「スペンセル／スタデーオフ／ソシヲロジー」の科目名で講義されている。濱野は後にスペンサーの Principles of Sociology, 2Vols. の一部を『政法哲学』として上下に分けて刊行している。また、山口松五郎はスペンダーの著作を、1883（明治 15）年に『社会組織論』、1884（明治 16）年に『道徳形而上学』、1885（明治 17）年に『哲学原理』を刊行していった。

1886（明治 19）年、東京大学は工部大学校を加え、帝国大学に改組される。慶應義塾はそれに応じるかのように、1889（明治 22）年に文学科、理財科、法律科からなる大学部を設置する。その際、社会学が文学科の 3 年次の科目として置かれている。そこで社会学を担当したのが、L.F.ライドである。ライドはオックフォード大学セントジョーンズ・カレッジの卒業生であり、1892（明治 25）年 1 月から 1897（明治 30）年 10 月まで、6 年にわたって社会学を教授した。また、1897（明治 30）年から 1898（明治 31）年はウードが社会学を担当した。さらに 1898 年は理財科の主任教授であったハーバード大学出身の G.ドロッパーズが社会学を担当している。

（2）三田社会学の発展

その後、三田で社会学担当したのが、田中一貞である。田中は 1901 年より義塾派遣留学生として、イェール大学で G.サムナーなどに学びマスター・オブ・アーツを得ている。さらにコレージュ・ド・フランスで G.タルドに学び 1904 年に帰国する。田中一貞は欧米の社会学を踏まえて、社会心理学的な社会学を展開する。また、哲学の川合貞一は 1905 年前後に社会学に興味をもち、A.コントは F.H.ギディングスの社会学を論じている。

文学科は 1910（明治 43）年に文学、哲学、史学の三専攻性になる。社会学は哲学に含まれることになった。さらに「大学令」の公布に基づいて、社会学は哲学科の倫理学及び社会学を主とするコースとして位置づけられた。田中は 1920 年に三田社会学会の発足した初代の会長となっている。しかし田中一貞は 1921 年 50 歳の若さで急逝する。その後、1921 年からシカゴ大学から帰国した福谷益三が 1926 年まで社会学を担当する。また、新聞記者であり、評論家であった若宮卯之助が 1923 年から 1930 年にかけて、文学部と法学部で社会学を講じている。かれは若い時にはアメリカやイギリスでの生活の経験から F.H.ギディングス、L.ウォードなどの研究の紹介に努めたが、次第に日本で社会学を行うことの意義を強調するようになっていた。

1927 年から長きにわたって社会学を担当したのが、新館正國である。新館は哲学科の倫理学・社会学のコースで社会学を担当する。新館は義塾派遣留学生としてドイツを中心に欧米に留学後、1939 年に帰国する。新館はドイツの文化社会学の影響を受けながら社会の本質論、社会学理論を中心に研究を進める。経済学部の教授であった加田哲二の社会思想の研究は単に経済学の領域にとどまらず、社会学の分野にも大きな影響を与えていた。また、佐原六郎（京都帝国大学卒業）は社会学と社会心理学の両方にわたって、教育に従事した。

現在の三田の社会学に大きな足跡を残しているのが、新館正國、加田哲二、奥井復太郎、米

山桂三である。とくに加田は研究のみならず、積極的に評論活動を展開する。奥井は社会政策と都市経済論から都市社会学に、米山は政治心理学から産業社会学へと研究の比重を移してゆく。新館以外の三人はそれぞれ経済学部、法学部の卒業であるが、学問の深化の過程で社会学の領域に入ってきた。とくに戦後、奥井と米山はともに社会学の領域で活躍することとなる。第二次世界大戦の激化は慶應義塾の社会学の活動を衰退させる。物資不足で出版もままならなくなったばかりか、学徒動員で学生も出征でいなくなっている。また三田や日吉の校舎も空襲で被災した。敗戦後間もなく、加田は突如大学を辞任している。これには戦時体制下での言動が関係しているのではないかといわれた。

戦後の新制大学はこれまでの大学像を一新させる。大学が駅弁大学といわれたほど数多くつくられたばかりか、既存の大学は規模を爆発的に拡大させた。新しい知識をもとめる若者が大学に押し寄せるようになる。とくに私立大学は授業料を抑えるためにも、多くの学生数を迎え入れた。経済が安定するにつれて学生数は急増し、マスプロ教育と揶揄されながら大学は拡大の一途をたどった。慶應義塾創立 100 年の時期は、大学が拡大のさなかであった。そうしたなかで、慶應で最大の学部となってきた経済学部から商学科が分離され、商学部が設立される。

慶應義塾は新制大学への移行に当たって、大学予科を教養部としてではなく教養課程として学部に組み込んだため社会学の担当教員は各学部に分属することとなった。各学部が整備されていくとともに、多くの社会学者が招聘された。戦前からの教授であった新館正國（社会学理論）、奥井復太郎（都市社会学）、米山桂三（政治社会学）、松本信広（民族学）教員に加えて、文学部に佐原六郎（京都帝国大学卒）（社会心理学）、横山寧夫（社会学説史、理論社会学）、仲康（フランス社会学・農村社会学）、中井信彦（社会史）、経済学部に青沼吉松（産業社会学）、中鉢正美（生活構造論）法学部に生田正輝（マス・コミュニケーション論）、商学部に向井瑛一（ドイツ社会学）、石坂巌（経営社会学・ウェーバー論）、医学部に矢崎武夫（都市社会学）などが教育と研究に従事した。文学部の哲学科にあった社会学のコースは社会・心理・教育学科にとして独立し社会学はひとつの専攻となった。

（3）大学院社会学研究科と三田社会学

1950 年に大学院社会学研究科が発足する。社会学研究科はこの時期の大学院としてはきわめて珍しく半ば学部から独立した大学院であった。また、社会学研究科といっても、その名称の意味するところは通常の社会学とは異なっている。そのことは、社会学研究科の英訳名に象徴的に現れている。社会学研究科の社会学の意味はソシオロジー（Sociology）ではなく、ヒューマン・リレーション（Human Relations）の文字が当てられている。これにはいくつかの要因があった。まず、第一に奥井復太郎が新しい大学像をもとめてハーバード大学に視察に行ったところ、社会学部が社会科学の新たな可能性を求めて改組され、人間関係学部となっていた。次に、社会学研究科が社会学専攻のほかに心理学専攻や教育学専攻を構成単位としていた。さらに社会学専攻のなかに民族学、社会心理学、社会史、マスコミュニケーションのコースを含

んだ広いものを目指していたという事情があった。こうしたことが、社会学研究科の国立大学の社会学講座との違いを際立たせる点ともなっている。研究科は奥井復太郎、米山桂三、松本信広（民族学）の指導のもとに独自の気風が生み出されることとなる。文学部の社会学専攻は、東京教育大学から有賀喜左衛門（農村社会学）、東北大学から石津照爾（宗教哲学）を招聘している。その間、東京大学の大学院から若いスタッフとして宮家準（宗教民俗学）を迎え入れている。

大学院社会学研究科の卒業生は戦後の慶應義塾の急激な拡大とともに、次々と社会学のスタッフのポストを得ていった。文学部に山岸建（文化社会学）、井関利明（産業社会学）、大渕英雄（村落社会学）、坂井達郎（歴史社会学）、法学部に十時厳周(社会変動論)、川合隆男（社会学史）、市川統洋（理論社会学）が就任した。また、学外では山中一郎（犯罪社会学）、原田勝弘（生活構造論）、米地実（農村社会学）などが卒業後も共同研究などで三田の社会学と深い関係を有していた。

社会学研究科の大きな特徴のひとつが、大学院社会学研究科が独立研究科であったこととも関係して入学者の多くが学部時代の専攻が社会学と異なることである。文学部、経済学部、法学部、商学部など多くの学部から院生を受け入れていた。文学部でも社会学専攻の卒業が意外に少なく、多くは他専攻の卒業生であった。このこともあって、社会学研究科の卒業生は文化人類学や、社会心理学、マスコミュニケーションはいうにおよばず、歴史学、政治学、経済学、経営学、行動科学などの看板を掲げて活躍している。文学部の社会学専攻は文学部の中で学生のもっとも大きな専攻となった。このため 1981 年に、社会学専攻と人間科学専攻の二つの専攻に分かれることとなった。社会・心理・教育学科は人間関係学科として 4 専攻に再編され、人間科学専攻は社会心理学を中心に新しい学問をめざした。

大学院社会学研究科の社会学専攻は博士課程の進学希望者が増加し、入試は大変な関門となっていた。修士課程の定員が 25 人だったのに対して、博士課程の定員は 3 人でしかなかった。博士の間で多くの浪人が発生していた。博士課程の定員が 6 人に変更になったために競争は幾分緩和されたが、博士課程の進学希望者には入試が大きな負担となっていた。

社会学研究科の卒業生は急増してゆき、さまざまな大学などに職を得て全国に赴任していった。また、高名な数多くの社会学の研究者を非常勤講師として招聘し大学院生に多くの刺激を与えた。とくに富永健一（経済社会学）は東京大学退職後、藤沢に新設された環境情報学部の専任教授となり社会学研究科の委員を謙坦した。現在では、研究会の委員はメディア・コミュニケーション研究所や教職センターの教員を加えている。今日では 100 人を超える社会学研究科の卒業生が大学教員として北海道から九州まで活躍している。また、大学教員の流動化の拡大とともに、他大学の大学院の卒業生が慶應義塾に各部門に社会学の職を得るようになる。外国の大学の卒業生が塾内でポストを得る機会が増えている。さらに教養科目の改編で、塾内で語学から自然科学にいたるまで他の講義科目を担当したり、他の分野で訓練を受けた研究者が、社会学の分野で研究を発表する機会が増大している。日吉や藤沢には三田とは別に独自の活動

を行う研究者が増えている。社会学の名称こそ同じでも、研究方法もバックグラウンドも異なる研究者が増えている。三田社会学会は 100 人を超える会員を抱えながらも、もはや慶應義塾の社会学研究者一部の集まりでしかなくなっている。大学院社会学研究科を卒業後、三田社会学とは別に各地で卒業生が集会をもっている。

3　社会学研究の変貌と三田社会学

（1）社会学研究方法の変化と公共性

社会学の研究には 1970 年代までにはある程度共通したものがあった。社会学理論の立場でいえば、構造機能主義やマルクス主義が自己の理論的立場を計る物差しにもなってきた。しかしその後は社会学研究方法の多様化もあいまって、学問としての一体感を持てなくなっている。21 世紀が近づくにつれ社会学理論の「ミクロとマクロ」「主体と構造」「行為と構造」「主観主義と客観主義」といった区分の中で、構造やシステム、客観といった法則にかかわるものより、徐々に主体や行為、主観などに研究の比重が置かれるようになる。わけても 1989-91 年の社会主義国の相次ぐ崩壊は、マルクス主義の理論への関心を失わせた。こうしたなかで、マクロな社会学理論全体への関心が低下していった。社会のあり方よりも「社会人のあり方」が社会学の焦点となるようになる。20 世紀の末にはマクロな社会理論は不人気となっていった。

そうしたなかで、社会にマクロな視点を提供したのが、公共性論である。公共性の議論はミクロからマクロまで比較的容易に分析レベルと分析領域を設定することができる。このため社会問題は抽象的命題を展開する社会学「理論」から、具体的な公-私関係を分析軸とする公共性の「型」に沿って分析を進められるようになっている。公共性の概念は社会学の新しい焦点になろうとしている。しかし公私関係はパブリック - プライベイト関係と異なった意味をもっている。公の概念が、聖なるもの、閉じられているという意味をもっているのに対して、パブリックの概念は、共通のもの、開かれているものと逆の意味をもっている

それどころか、東アジアにおいて私のことばは、貶められる概念となっている。漢語の「私」は、個人の利益をむさぼるとか、秘密のとか、闇のといった否定的な悪い意味をもっているばかりか、曲私、利己などの反倫理的意味を帯びている。この点、英語のプライベイトと異なっている（アレント 1994：60）。英語のプライベイトはむしろ積極的意味をもっている。今日でもプライベイトの語は文脈によって private profit（私利）や private advantage（私的便宜）などは好ましくないことを意味する場合があるが、一般に、プライベイトの語は個人的（personal）と結びつききわめて好意的な意味で使われている。プライベイトはブルジョワ的な人生観の確立とともに、肯定的なイメージでとらえられるようになった（Williams 1976=2002：243）。

東アジアでは私が貶められることから、私は公を僭称して主張される。私は公としての面子のもとに活動せざるをえないのである。福沢諭吉は私を否定することの限界に早くから気づいていた。福澤は「私利は公益の基にして、公益は能く私利を営むものであるに拠て起るべきな

り」と主張する。そして、福沢は「立国は私なり、公に非ざるなり」と断言するのである（福沢 1982：239）。福澤はこうした点から、蔵内数太の指摘するように「社会学の学論はしなかったが、社会学を実践した」のである（蔵内 1966：83）。

現在ではグローバリゼーションのもと、日本の公 - 私関係も微妙に変化してきている。日本における公私関係はパブリック - プライベイトの影響のもと、旧来の公概念に＜共通化＞と＜開放化＞を、また「私」概念に＜個別化＞と＜閉鎖化＞をもたらしている。こうしたなかで、社会学の斬新なテーマが公共性の観点から取りあげられている。そのなかで、新しい公共性とは「存在」としてより、「機能」としての性格を強めている。

（2）研究環境の変化と文部行政の変化

最近の社会学の研究テーマは徐々に大学で教えられるものではなく、現場で体験するものとなってきている。社会学のテーマはあらゆる項目におよんでいる。その一方で、社会学のほとんどの分野は他の学問の領域と重なっている。したがって、社会学者は他の学問分野の研究者とどのように違うのだろうか。その区分を学問の内容から行うことは難しい。社会学者を社会学者として自覚させているのは、大学での卒業学科、所属学会などであり、その意味では文部科学行政に対応したものでしかなくなっている。

研究者は外部の社会とのかかわり以上に、学会や行政の意向に注意を払わざるを得なくなっている。文部科学省も戦後の各省庁の業界化と同様に、研究者の組織化に成功したといえよう。研究者は成果のはっきりしない著作活動よりも、むしろ学会での活動にアイデンティティを求めるようになっている。この意味では、研究は「学会の時代」「組織の時代」がやってきている。これにともなって、学会の組織化は一面で、研究者が利益集団と化し他業界の研究者や独立した研究者の研究を貶める危険をもはらむこととともなっている。科学研究費をはじめさまざまな政府資金は研究の在り方に大きな影響を与えるようになっている。金、ポストが人を動かすことは共通である。かつて研究者は貨幣や権力に超然としていた。しかし現在の研究者はますます貨幣や権力に敏感にならざるを得なくなっている。

社会学研究は量的発展のなかで試練に立たされている。社会学の研究の多くが、誰もが程度の差はあれ、生活のなかで直接、間接に経験していることがあるものなのである。社会学が現実の社会を直接研究対象としようとすればするほど、わざわざ大学において外国の本や社会経験の乏しい学者から学ぶものではなくなってきている。まして大学院はホームレスから消費税をはじめさまざまな税金を徴収してまで活動するものではなくなっているのかもしれない。

社会学の対象の多くは、もはや大学の教員が一番知識をもっているところではなくなっている。研究者はどこにでもいる時代となった。A.ギデンズが強調するように、社会科学の知識は一般化されるほど社会の内部に取り込まれ、その成果は自明のこととなり意識されなくなる。社会学の知識は、単純な増加形態を示さない。このため社会科学の業績は成功によって、かえって覆い隠される側面がある。この点では、社会科学は自然科学よりもはるかに強い影響力を

もっている。社会学の成果は、モダニティとレフレクシヴリーに関係しているのである（ギデンズ 1998：34）。

学問的知識は 19 世紀から 20 世紀に、アカデミー、サロン、サークルなど外部から大学に取り込まれ、大学を学問の中心へと発展させていった。その頂点をなすのが、新しい大学として設立されたベルリン大学の理念に象徴的に謳われた。大学は学問を発展させる組織として神話化され、知的な関心のある人びとから歓迎された（潮木 2008）。しかし今日、大学は再び知識の中心としての地位を失いつつある。新しい学問的知識が大学の外部で生み出されている。とくに、現代の社会学の研究はそうした傾向を強くもっている。かつて社会学は「社会学者の数」だけあるといわれた。しかし今日では、社会学の研究は「社会人の数」だけあるとまでいわれるようになっている。最近の社会学は社会科学の他の分野の研究にも増して、そうした発展への志向性を強く示している。

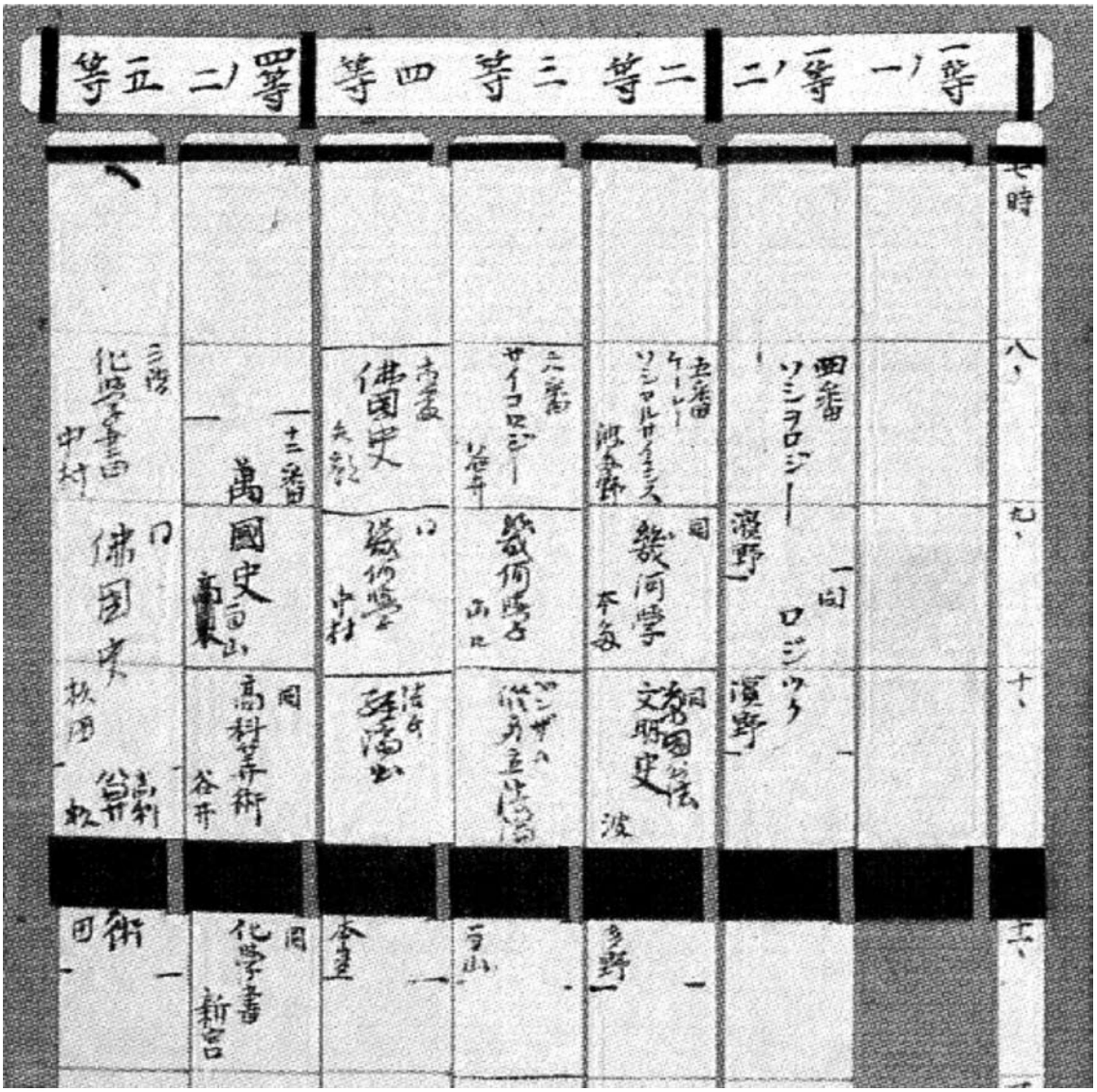
大学や大学院は社会に不可欠な機関として社会に溶け込んでいる。実務大学院の発足で教員層も変わってきた。学生や大学院生は講師のジャーナリスト、作家、評論家、ビジネスマン、職人、経営者、役人、スポーツ選手などの職業人としての経験や病人、ホームレスなどの人間としての経験など身近で生の知識をもとめるようになっている。かつて大学がもっていた俗世間から超然とした「栄華の巷を低く」見る学問的態度は過去のものとなっている。社会の動向から隔絶した知識を追求することなどは「はまっている」などと揶揄されるありさまである。昔から大学には社会の動きを取り込む面と背を向ける側面とがあった。しかし 20 世紀後半の大学教育の急激な拡大とともに、大学はもはや背を向けては存在し得ないほど拡大している。多額の税金が惜しげもなく研究に投じられるようになった。大学の広範な意義が認められたことが、逆に大学が社会に取り込まれることを意味することになった。社会と大学の垣根は急速に低くなっている。とくに社会学の活動は社会の他の社会科学の分野にもまして、その傾向を強く持っている。こうしたなかで、念仏のように研究成果が唱えられ、無数の研究が玉石混交のまま生み出されている。

福澤諭吉にはじまった慶應の社会学はやがて濱野定四郎や門野幾之進などの弟子たちに引き継がれる。社会学は大学部の設置とともに外国人教師に担われるようになる。その後、社会学は義塾から欧米に長期派遣された研究者によって引き継がれる。戦後になると、社会学は文学部の社会学コースばかりでなく、社会学の科目が各学部に設けられ急激に拡大した。さらに慶應義塾の社会学は 20 世紀の末から 21 世紀の初頭に、外国で教育を受けた研究者を交え、多様な内包と外延の広がりを生み出した。それは、社会学の内包の蒸発と外延の消滅と紙一重ともなっている。そのことはまた、21 世紀初頭の日本の大学が置かれた状況でもある。慶應義塾の社会学は福澤以来の独自性への契機をもちながらも、その例外ではなくなっている。

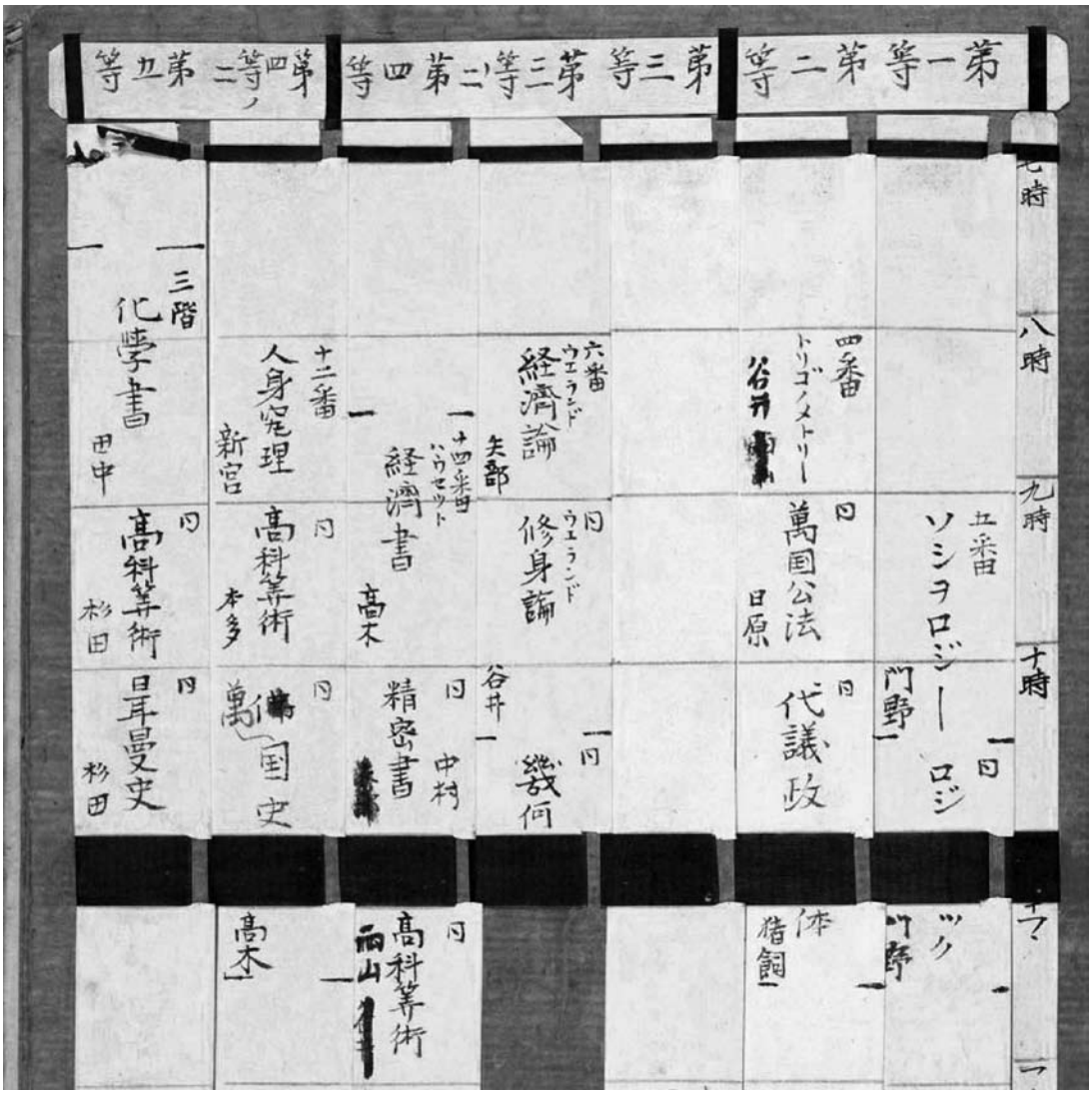
［追記］

現在、慶應義塾大学の社会学教育は他の学問分野の教員を含め多数の常勤、非常勤の教員の手で行われている。非常勤講師の中には社会学研究科の卒業生も少なくない。2007 年の 150 周年時に慶應義塾に社会学の専任者として、三田で講義しているのは次の方々である。

文学部社会学専攻：平野敏政（家族社会学・社会組織論）、藤田弘夫（都市社会学・地域社会学）、長尾真理（理論社会学・医療社会学）、浜日出夫（社会学説史・知識社会学）、岡原正幸（感情社会学、ボランティア論）。人間科学専攻：渡辺秀樹（家族社会学・教育社会学）、鹿又伸夫（社会階層論・比較社会学）、織田輝哉（理論社会学・数理社会学）。法学部政治学科：霜野亮（理論社会学・社会学説史）、関根政美（エスニシティの社会学・オーストラリア論）、有末賢（生活史・地域社会論）、澤井敦（社会学説史・死の社会学）。商学部：三浦雄二（産業社会学・ラディカル社会学）、松村宏（ウェーバー論・社会思想史）。教職センター：竹村英樹（教育社会学・歴史社会学）。


一等 一
一等 二
二等 三
等 四
等 二
等 五
七時
八
九
十
十一
十二
四番
ソシヨロジー
一同
ロジック
濱野
五番
ケーレー
ソシヨルサイエンス
二番
サイコロジー
谷井
同
幾何學
本多
同
文明史
波
三番
佛國史
矢野
同
幾何學
中村
法文
同
三番
化學實驗
中村
十三番
萬國史
高橋
同
佛國史
秋田
同
高科學術
谷井
高科學術
秋田
同
化學書
新宮
本堂
多野

資料 1



資料は慶應義塾メディアセンターの掲載許可を得て、転載している

【参考文献】

秋元律瑯，1979,『日本社会学史』早稲田大学出版会
有賀長雄，1977,『社会学史』いなほ書房
安西敏三，1995,『福澤諭吉と西欧思想』名古屋大学出版会
————，2007,『福澤諭吉と自由主義』慶應義塾大学出版会
アレント,H.， 1994,（志水速雄訳）『人間の条件』筑摩書房
ウィリアムズ,R.， 2002,（椎名美智他訳）『完訳キイワード辞典』平凡社
ウェーバー,M，1993,（尾高邦男訳）『職業としての学問』岩波書店
ウォーラーシュタイン,I.，1996,（山田鋭夫訳）『社会科学をひらく』藤原書店
潮木守一，2008,『フンボルト理念の終焉？ 』東信堂
小笠原真，2003,『日本社会学史への誘い』世界思想社
ギデンズ,A，1998,（藤田弘夫監訳）『社会理論と現代社会学』青木書店
川合隆男・竹村英樹編，1998,『近代日本社会学者小伝』勁草書房
川合隆男，2003,『近代日本社会学の展開』恒星社厚生閣
蔵内数太，1966,『『社会学・増補版』培風館
慶應義塾編，1908,『慶應義塾五十年史』慶應義塾
————，1933,『慶應義塾七十五年史』慶應義塾
慶應義塾史編纂室，1958,『慶應義塾百年史』上巻　慶應義塾
————————，1962,『慶應義塾百年史』（大学編）慶應義塾
慶應義塾福澤センター編，2004,『慶應義塾社中之約束』慶應義塾福澤センター
慶應義塾編，2009,『慶應義塾創立 150 年記念未来をひらく福澤諭吉展』慶應義塾
小泉仰，1989,『西周と欧米思想の出会い』三励書房
斉藤正二，1976,『日本社会学成立史の研究』福村出版
寺崎修，2008,「濱野定四郎」『慶應義塾事典』慶應義塾
下出隼吉，2005,『明治社会学史資料』いなほ書房
白井堯子，1999,『福澤諭吉と宣教師たち―知られざる明治期日英関係―』未来社
東京大学社会学研究室編，2003,『社会学研究室の歩み』東京大学社会学研究室開設 100 年記念事業実行委員会
富永健一，2004,『戦後日本の社会学』東京大学出版会
————，2008,『思想としての社会学』新曜社
芳賀徹編，2000,『翻訳と日本文化』山川出版社
福沢諭吉，1878（1981),『痩せ我慢の説』岩波書店
藤田弘夫，2006,「世界の大学・国家の大学・地域の大学」関東都市学会編『大学と地域社会』コーシン出版
————，2009,「空間表象から見た公共性の比較社会学―社会理論から公共性論へ」『現代社会学理論研

究』第 3 号
ホブズボーム,E，1996,（河合秀和訳）『極端な時代』三省堂　上巻
山口静一編，2000,『フェノロサ社会論集』思文閣出版
ヤスパース,K，1999,（福井一光訳）『大学の理念』理想社

（ふじた　ひろお　慶應義塾大学文学部）